

綴葉

ていよう

'25 1
2

No. 434

あなたが創る生協の書評誌



話題の本棚

山田稔著『もういいか』

河野裕著『彗星を追うヴァンパイア』

特集／音楽

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館2階

Tel:771-6211 / E-mail:ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyoku/public_relations/



UNIV 京大生協
CO-OP 綴葉編集委員会

老いの境地、いかに極まれり——山田稔 九四歳

もういいか

山田稔著
編集工房ノア



私はある週刊誌で安岡章太郎とスカトロロジーについて対談することになる。彼は初対面で固くなっている私を、「よう」といったいわば同志の親愛感にみちた笑顔で迎えてくれた。「対談」でどんな話をしたかすっかり忘れていた。たまたその席で出されたフランスの赤葡萄酒を口にふくみながら彼が「うん、こいつはうまい」とつぶやき、眼を細めて瓶のラベルを読んでいたおだやかな表情を、私はついこないだのことのように懐かしく思い出す。

「もういいか」——そう呟くのは、御年九四歳の山田稔である。エミール・ゾラ、ロジェ・クルニエ、アルフォンス・アレーの翻訳、またスカトロロジー研究(?)で知られる山田は、一九九四年まで京都大学でフランス語を教えていた。退官後は京都にとどまりながら随筆を中心に文章を書き続けている。「エッセイ」ではなく「随筆」と呼びたくなるそのいぶし銀の文章には、地味さゆえの滋味がある。別書『あ・ぷろぼ』で言われているように、山田が好むのは「人生を思い出として、完了した過去の相の下に反芻すること」。それゆえだろうか、山田が書く文章の大半は回想録だ。「あれもこれもいまでは遠い昔のこと」——そう言って、今は「き人びとの在りし日の姿を文章を通じてよみがえらせる。それが山田のスタイルであり、本書もご多分に漏れず、存命の人間はほとんど出てこない。

壁一面に広がる本棚の前に立ち、気の向くままに本を取り出しては、その思い出を語る。あるいは当時の日記を頼りに、数十年前の出来事を回想する。日記がなくては思い出せない、それほど昔の出来事たち。回想されるのは、安岡章太郎、耕治人、瀬戸内晴美、生田耕作、坪内祐三、小沢信男といった渋い面々。なかでも山田が安岡に初めて会った際の描写は美しい。少し長いが引用しておこう。

何ということはない地味な一場面。しかし日常の延長線上にあるこうした静かな一場面を描くこと、読むことに穏やかな喜びを覚えるようになること、それがすなわち「老い」ということなのだろう。しかし、それにしても「もういいか」である。こんな言葉をタイトルに持つてくるとは、老いの境地も極まるころまで極まってしまっている。とはいえ、山田の老いに悲壮な感じは伴わない。そこにはつねにユーモアが漂っている。たとえば懐かしき日々の回想が続くなか、山田は突然「こんなことを書く。『佐野洋子はまた、十枚ほどの短いエッセイのなかで『ウンコ座り』』という言葉を二十二回も繰り返すのである『ウンコ座りって、小文字のbみたいなですね』。『スカトロロジー(糞尿譚)』なる著作を持つ山田ならではの脱線。

これも山田の言う「死者のユーモア」なのだろうか。「実際は苦しいにもかかわらず、後に残る者に楽しい思い出を残す、これが死者のユーモアだ。糞尿の話をするので死者となる準備をする、それなら死ぬ悪いものではないと思えてくるが、どうか。(ばや)

(二八八頁 税込二五三〇円 10月刊)

科学と怪物は、戦争の時代に出会う——山田風太郎賞候補作

彗星を追う

ヴァンパイア

河野裕著

KADOKAWA



十七世紀、イングランド。戦地に駆り出されたケンブリッジの学生・オスカーは、詩学者を名乗る謎めいた男・アズに命を救われる。たったひとりで兵たちを圧倒し、空高くまで飛翔する彼の力は、科学者の卵であるオスカーにとって魅力的なほど未知のものだった。時あたかも、科学革命の時代である。ニュートンの世界の原理に従わないアズ——血を操り、決して老いることがない怪物は、自身の謎を解き明かす存在として、オスカーに希望を見出す。

かくして科学者と怪物の、奇妙な友情が始まった。

本書は科学史を題材としてファンタジックに展開される、空想科学小説である。現在の科学者の名前が多く登場し、なかでもニュートンはオスカーの師匠として重要な役割を果たす。けれども彼らは単に小説の背景として埋め込まれているのではない。有名無名の科学者たちの営み、その総体としての科学こそ、本書の主題なのだ。

小説は、ニュートンに並ぶ同時代の天才として、研究成果を共有する科学のネットワークをつくりあげた立役者・オルデンバークを印象的に登場させる。《たったひとりの天才がどれだけ速く進んだとしても》と彼は言う。《必ず人類はその足跡を辿り、いずれ追いつき、先へ行く。必ず——》

そして断言するのだ——《その確信の名を、学問という》。千年の時を生きるアズは、そんな人類のつくりあげた科学体系を脅かす存在だ。けれども同時に、科学者が持つ未知への憧憬を駆り立てる存在であり、科学という巨人の歩みを見守る存在でもある。小説は彼とオスカーとの交流を中心にして、科学を肯定し、人類を信じ、そして、未知なる他者を理解することを説いてゆく。

けれども科学革命が同時代の不安定な情勢を背景としていたように、オスカーもまた、争いから自由ではられない。アズと関わったことよってなおさら。ときに大切なひとを、家を、学問の場所を失いながら、それでもオスカーは科学を志す。その悲壮な運命がたどり着く結末は。そして、アズとはいったい何者なのか——？ 率直に言えば、その果てに示されるヴィジョンについて、評者は科学的なものだとは評価できない。けれどもそれが明かされるまで読み進めた読者ならば、重要なのはその閃きの向こう側で確信される、学問の喜びにこそあると知っているはずだ。

*

本書は科学を肯定するにあたって、その営みが近代においてもたらした罪を直視しているわけではない。現代の科学的知見を遡って持ち込む態度も、科学史に対して誠実と言えるだろうか。けれどもそうした疑問点を挙げたうえで、むしろそこを糸口として、対話を始められる可能性が、本書にはひらけているように思う。なんとすればその対話こそ、学問が始まる現場だろうからだ。

心に学問の火を熾す、壮大なエンターテインメント。(水炊き)

(三三四頁 税込一八七〇円 8月刊)

響け！ユーフォニアム
北宇治高校吹奏楽部へようこそ
 武田綾乃著 宝島社文庫

青春の悔しさ、喜び、苦さ、切なさ、誇らしさ。さまざまに混じりあった音が奏でられる。そんな音に耳を澄ませてみたい。



本書は3期にわたってアニメ化され、劇場版も5回公開された人気作品の原作小説である。かつては吹奏楽の強豪だった北宇治高校は、今ではすっかり弱小校。中学で吹奏楽をやっていた黄前久美子は、そんなところで部活を続けるつもりもなかったのだが、ひょんなことから入部することに。そして新しい顧問のもと、全国大会金賞を目指して邁進していく。

魅力的なキャラクターたち、彼女らが織り成す人間関係の微妙、そして学年が上がっていくにつれて見せる成長と葛藤。そういった作品の魅力は、アニメと小説、どちらの媒体で楽しんでも変わることはない。しかし、原作小説では、アニメでは聞くことのできない登場人物たちの心の声が聞こえてくる。人間関係のトラブルが起きた時、キャラクターと一緒にどきまぎしたり、ひやりとしたり、小説では彼女らの感情に一層寄り添って楽しむことができる。

青春小説の良さは、自分が失ってしまった（と思い込んでいただけかもしれない）過去の輝きを、まざまざと見せつけてくれるところにある、と私は思う。こんな青春送ってみたいかった！吹奏楽とは縁遠かった（評者のような）人にもそう思わせてくれる一冊だ。

何かに一生懸命になるのは難しい。立ちほだかる障害は、外だけでなく、自分の中にも存在している。それでも、過去も現在も受け入れつつ進んでいく彼女らの姿を見ていると、少しばかり勇気をもらえる気がするのだ。

(荒砥)

(319頁 税込723円)

特集

音楽

人が音を奏でるとき、そこには祝福が、孤独が、祈りが込められているのかもしれない。

人が音に耳を澄ますとき、そこには感動が、連帯が、癒しが生まれるのかもしれない。

今月お届けする特集は「音楽」。綴葉編集委員による計7冊のセレクション・アルバムをお届けします。

(浅煎り)



新しい時代への歌

サラ・ピンスカー著、村山美雪訳
竹書房文庫

骨まで響くドラム。イヤホン越しに聴くのとではまるで違う演奏。心地よく肌を焼くような歌声に誘われて、人波の熱気をものともせずステージを目指した、あの夜の昂揚を思い出した。



舞台は爆破テロと感染症の流行で参集規制法が敷かれた社会。人々はフーディという機械で仮想空間に接続し、仕事も、学校も、スポーツ観戦もライブも、すべてオンラインで行う。どこかで聞いたような話だが、本作の出版は2019年なのだから驚きた。そう、これは奇しくも現実になってしまったSF作品だ。

娘の安全を第一に考える両親のもと、人との交流を避けて田舎の農場で暮らすローズマリーは、ひょんなことからステージ・ホロ・ライブに転戦する。密かに活動が続けているミュージシャンたちを発掘し、ヴァーチャルライブにスカウトするのが彼女の仕事だ。初めての都会、密集する人々に気圧されながらも、音楽への情熱に突き動かされる彼女は、やがて前時代に“最後のライブ”を行ったアーティスト・ルースに出会う。

音楽が、自分らしくいられる世界まで導いてくれた。ローズマリーにかつての自分を見たルースは、そんなふうに語りかける。閉塞感に風穴を開けてくれる音楽への限らない愛情。だから、ルースは抵抗する。一分一秒単位で完璧に管理されるヴァーチャルライブに。アーティストを集約し、利益を独占しようとするステージ・ホロ・ライブに。そしてその背後にある、あらゆるデータが個人に紐づけられ記録される、高度情報化社会に。

オンラインで何でもできる時代に、それでも人と人が同じ場所で触れ合うことの意味を高らかに歌い上げる作品。

(くたくた)
(608頁 税込1650円)

羊と鋼の森

宮下奈都著
文春文庫

鍵盤に指を置く。ハンマーが弦を叩く。音が生み落とされる。——その響きは、私たちの心を深く静かな森の奥底へと誘うかのよう。

ハンマーは羊毛のフェルト、弦は鋼、そしてピアノ本体は森で育った木から作られる。『羊と鋼の森』とはまさにピアノが生み出す世界そのものだ。この物語の舞台は北海道の小さな町。駆け出しの調律師の外村は不器用だが、誠実に働くなかでさまざまな出会いを経験する。担当先の双子の姉妹、魅力的な同僚たち、そして彼をピアノの世界へ導いた世界的な調律師。彼はどのような音を作る調律師になるのか……。これは音楽小説でもあり一人の青年の成長の物語でもある、と書いてしまえばそれまでだけれど、本作ほど静謐で温もりのある物語を私は知らない。

ただ音程を合わせるだけが調律師の仕事ではない。ピアニストが奏でたいと願う音色を汲み取り、無限の配色からただ一つを現実にならねばならない。外村は、目指すべき音について師に指南を乞うた。その答えは「明るく静かに澄んで懐かしい文体、少しは甘えているようでありながら、きびしいものを混えている文体、夢のように美しいが現実のようにたしかな文体」——小説家・原民喜の言葉だ。

この言葉に触れて、葉を挟んで天を仰いだ。こんな音が作れたらどれほど幸せだろうか。それが織りなす旋律はどんな景色に連れ出してくれるのだろうか。音楽という深い深い森。それがあまりに豊かで美しいから、この世界に絶望していても、私は生きていける。そして人は皆、なにかしらそんな宝箱を心に隠しているのかもしれない、なんて、思いつつ。この名作を、あなたも。

(浅煎り)
(288頁 税込792円)



音楽嗜好症(ミュージコフィリア)
脳神経科医と音楽に憑かれた人々
 オリヴァー・サククス著
 大田直子訳 ハヤカワ文庫NF

本書は数多くの症例をもとに、音楽が脳の機能にもたらす多種多様な影響を医学的に考察してくエッセイ集だ。29章にも及ぶ膨大な症例を扱っているだけでも驚異的だが、特筆すべきは個々の症例を読ませる情感あふれるナラティブと、多角的かつ合理的な医学的分析が見事に両立していることだ。

具体的な内容を見てみよう。「瞬間を生きる——音楽と記憶喪失」では、後天的な脳の感染症により、記憶喪失に加え、数秒も新しい記憶を維持できなくなってしまった音楽家、クライヴとの交流が綴られる。クライヴはおぼろげな知識を頼りに、反復された会話を続けようとする。連続的な行為が中断されてしまえば、記憶を失っていることに気づかされ、たった今意識が戻ったような感覚に襲われてしまうからだ。断続的な人生を意識あるままに歩まなければならぬ恐怖は想像を絶する。しかし、多くの記憶を失いながらも音楽にまつわる技能は全く失われていなかった。クライヴは楽譜を手に取り、完璧に合唱、演奏、指揮をこなすことができたのだ。

なぜこのような奇跡が起きたか。著者はその医学的根拠を探っていく。エピソード記憶と手続き記憶をはじめとした意識と記憶にまつわる考察に始まり、演奏と無意識運動の対比、音楽を思い出す、聞く、奏でるといった行為の時間的特異性へと思考を進めていく。音楽を解体していく多角的な視点に驚くと同時に、音楽の神秘性は却って増していく。

本書の記述は音楽的にも医学的にも決して易しくはない。しかし、膨大な症例の中にはきっと興味をひくものが見つかるだろう。音楽観を一変させる強烈な一冊を是非。(茂)

(544頁 税込 1188円)



パリ左岸のピアノ工房
 T・E・カーハート著、村松潔訳
 新潮 Crest ブックス

「息を詰めてそっと鍵盤のふたをあけた。いつでも、こういうときは、別の世界へ通じるドアをあけるみたいにわくわくする。」

本書を読むとピアノという楽器の物体としての存在感に圧倒される。音は目に見えないし掴めもしないのに、それを生み出すピアノはひたすらに物質的なのである。鍵盤のふたをあけるという動作に胸が高鳴るのもそのせいだ。長年の演奏ですり減った象牙の鍵盤、調律師によって精緻に張られた弦、美しい曲線を描く大屋根。そしてこの重量。担がれたピアノが一段一段踏みしめるように階段を登って部屋にやってくる描写が印象的だ。

パリ左岸、カルチエ・ラタンには小さなピアノ工房がある。そこでは、たくさんの古いピアノが職人・リュックの手によって再生されるのを待っていた。大人になり再びピアノを自身の生活に迎え入れることを決めた著者は、自分だけのピアノを探してこの工房へ通う日々を過ごしている。リュックに言わせると、ピアノは「押入にしまっておく楽器じゃない。あんたはピアノといっしょに暮らすことになる。(……) 家族の一員のようなものだ。だから、ふさわしいものでなければならぬ」。そうして見つけたピアノはどんなに特別だろうか。

本書はノンフィクションだが、あまりにドラマチックでこれが実話だということをししばし忘れてしまう。それほどに、ピアノのある生活は人生を劇的に変えてしまうのだろう。

ピアノが佇む部屋の角を眺める。そこにピアノがない景色を、そこが空っぽだったことを思い出すことはもうできない。「それはまるで別の人生でのこと」に思えて。(ひるね)

(320頁 税込 2420円)



現代音楽史

闘争しつづける芸術のゆくえ

沼野雄司著 中公新書

ジョン・ケージの『4分33秒』について、誰しも一度は聞いたことはあるだろう。楽譜のすべてが「休止」で構成された、音のない音楽。けれどもこんにち、その趣向ばかりが独り歩きしてしまい、彼が音楽史においていかに位置づけられるのかというところまで意識が向けられることは稀であるように思う。

本書は、そんなケージに代表される現代音楽の歴史を概観し、音楽家たちそれぞれの実践を大きな流れのなかで捉える一冊だ。調和の取れた音色を壊しにかかるシェーンベルクの「無調」に始まり、数列によって支配される「セリー音楽」、あるいは外界の録音から構成される「ミュージック・コンクレート」……。それは音楽なのか、と思わず問いたくなる実験的な趣向の数々は、いったいどこから生まれ、何を目指したのか？

理解の鍵となるのは、二十世紀（ひいては現代）という時代である。機械文明の発達。ファシズムの台頭。近代への疑義。音楽そのものを破壊し、いかなる抑圧からも自由であろうとする現代音楽は、現代史と鏡映しになっているのである。音楽家たちが生きた場所と時代、そして同時代の絵画や建築、思想も参照することで、著者は現代音楽が切り結んできたものを説く。音楽は抽象的な芸術だが、ゆえに《さまざまな理想と現実をめぐる闘争や挫折が、小さな楽曲の中に封じ込められているように感じられるのだ》。

現代音楽は初めて聴く人間にとって、音楽かどうかさえ疑わしい。けれども本書を読み進めることで、それまで雑音にしか聴こえなかった音の向こうに、音楽家たちの切実な問いかけが聞こえてくるはずだ。（水炊き）

(288頁 税込990円)



ポピュラー音楽と現代政治

インドネシア 自立と依存の文化実践

金悠進著 京都大学学術出版会

ベトナム戦争の時代、反戦と平和を歌ったポップ・ディランを知っているだろうか。音楽を用いた国家への抵抗運動の折には、国家は時に音楽家の表現の自由を制限し、音楽家はこれに抗う。音楽と政治は互いを利用し合い、貶め合う複雑で親密な関係性を持つ。

インドネシアでは、とりわけ政治体制が音楽の潮流に大きな影響を与えた。独立後初の大統領は独裁的でインドネシア・ナショナリズムを重要視する政策を行った。そのため、ロックやジャズなどの西洋的な音楽は排除された。しかし、政権が変わると、ポップ、ロック、そしてダンドゥット（マレー音楽にインド映画の音楽やアラブ音楽などを融合させた雑種音楽）という国際色豊かな三大ジャンルが構築される。

音楽が政治に振り回されているかと思えば、政府への抵抗に使われるケースもある。2018年の音楽実践法の草案では、著作権の保護などと同時に、表現の自由が制約される非民主的な条項が含まれていた。創作過程における7項の禁止行為があり、中には「海外のネガティブな影響を帯びているもの」など不明瞭な表現も含まれている。これに対して、音楽関係者と政府が議論を重ね、互いの妥協点を法案に反映させることに成功した。

現代の日本で生活していると音楽と政治の関係性はあまり見えてこない。パレスチナ問題などの世界情勢が流行りの音楽に影響を与えないことからわかる。しかし、音楽と政治のあいだには複雑な関係性があり、必要な時に手を取り合って音楽文化を構築しているのだ。本書を読むことで、日本では見られないこの関係性が垣間見える。（ブラチ）

(326頁 税込3960円)



新刊コーナー

ヨシダ檸檬ドロップス

若木民喜著
小学館

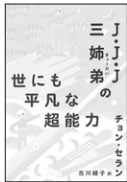
さて、『ヨシダ檸檬ドロップス』である。主人公の可志夫は愛人だらけの京大生に囲まれ、自分の個性のなさに悩む微笑ましい一回生。彼の前に現れるのは、高校の時から彼を狙っていた元マンドリン部、元プロレス女子の陽子（名前に「陽」が入っていることに注目）である。

家が燃えたのでルネに任んでいる彼は、ある日突然プロレスの試合に巻き込まれ、なんと陽子に告白されてしまう！（「陽」だからね）というのがまあ大体のあらすじである。感嘆符を使ってみたが、ラブコメなんだからそりゃ、突然告白されるのが筋ってもんだろう、とも思う。が、それでも正直ドキドキした。そして、僕たちにはこの漫画を他の人と違った読み方をする権利がある。背景をよくみて欲しい。ルネ、JK（ハンバーグのほう）、時計台、などなど、見覚えのある景色が白目

押し、元ネタを探す楽しみは尽きないだろう。「キャラバン」は探すのが難しいので挑戦してみてくれたまえ。ちなみに、ルネじゃないけど、部屋に住んでいる人というのにもたまにいる（大体電気が止まってる奴）。僕です。

とすると、僕らの大学生活に足りないのはラブコメの「ラブ」の部分ということになるようだ。しかしその点心配無用。ここまでリアルに京大周辺の地理を描いているのだ、その他の面は現実が自ずと合わせてくれることだろう。哀れな京大生諸君、妄想を天まで積み上げる。お手本は目の前に。（コーク）

（一九二頁 税込七七〇円 11月刊）

J・J・J三姉弟の世にも
平凡な超能力チヨン・セラシ著、古川綾子訳
亜紀書房

長女・ジェイン、真ん中の弟・ジェウク、末の弟・ジェフンの頭文字をとって

J・J・J三姉弟。ものすごく仲が良いわけではないのだが、あるとき三人でバカンスに行ってみることにした。すると戻った頃には超（？）能力を手に入れている。いざ能力を

使って三人一緒に人助けを……という物語かと思いきやそうはならない。この三姉弟はそんなに連絡を取り合ったりしないので、自分の中だけで、ある日突然自覚めた超能力をちょっと得意げに思うのだ。これは、各々が自分の生活の中で誰かを救おうとするお話だ。

彼女らが手に入れたものは、「超能力」といえる確かに超能力なのだが、おそらく皆が想像する世界を救っちゃうような力ではない。例えばジェインは手の爪がとてつもなく硬くなった。金属の爪切りで切ろうとすると刃先が負けてしまうくらい。ちなみに足の爪は普通に切れる。病気だろうか？ 三〇代のジェインは魔法なんかよりもそちらを気にする。伸びすぎた爪に困っていたある日小包が届いた。入っていたのは、この硬い爪を切ることでできる爪切り。そして「Same 1」という謎のメッセージ。誰を、どうやって救えということか？ 同じ頃、ジェウクとジェフンの元にも小包とメッセージが届いていた。

使命感を抱くにはささやかすぎる超能力。しかし三姉弟は、あまりに自然にそれを受け入れ人を救おうとする。「平凡な超能力」を人知れずクールに使いこなす様は読者の心を温める。世の中にはこんな優しい人が案外たくさんいるのかもしれない。と。（ひるね）

（二七六頁 税込二七六〇円 11月刊）

地図なき山

日高山脈49日漂泊行

角幡唯介著
新潮社

地図のない世界とはどのようなものか。この解釈を間違えなく、たちまちこの本

は「ただの登山記」になってしまつう。

「人類未踏の地」や「地理的空白部」など、人間に知られていない場所へ（地図がない）と捉えていた著者。しかし、著者の考え方に転機が訪れる。十九世紀中葉の北極圏の地理的情報がほとんどなかった時代に遭難・全滅したフランクリン隊の足跡を辿る北極圏での旅である。著者は彼らとほとんど同じルートを辿り、同じ景色を見たはずなのに、彼らの見た風景と自身の見た風景のあいだに断絶を感じた。それは、地図による情報の違い……。彼らの感じた先の見えない絶望と同じ感情を抱けなかったためである。この出来事以降、地図の空白部を旅した人間の観た景色を追い求めるようになる。

本書が「地図を持たない」無謀な登山記録でない理由は、著者の目指したものが「地図を持たない人が冒険した時に観る景色」だから

らだ。すぐに情報の波に足元を掬われてしまう現代における地理的情報の避け方。視覚情報に依拠する「ライン」取りではなく、長年の経験と感覚に完全に依拠する形でのルート決定。山という自然の脅威をもたらす存在に對しての疑問と恐怖。登山を繰り返すうちに徐々に「地図なしの日高山脈」が消えてゆく様子。自らの感情とともに経験を描き出すGPSやインターネットが発達した現代、事前情報なく旅をする機会はほとんどない。著者の旅の足跡を辿ることによって、新たな旅行体験が拓ける。

（二八八頁 税込三三〇円 11月刊）

（ブラチ）

DUCKS(ダックス)

仕事って何？お金？やりがい？

ケイト・ビートン 著

椎名ゆかり訳 インターブックス



カナダ北西部・オールドバータ州。オイルサンドの採掘場には、高収入を求めた多く

の人びとが流入していた。大学を卒業し学生ローンを抱えたケイティもその一人だった。

本書は、彼女が二年間のオイルサンド採掘場での体験をありのままに描いた自伝的漫画

だ。この作品で彼女は、労働現場を取り巻く数々の問題を告発している。

圧倒的に男性の割合が高い採掘の現場で、ケイティは過度な注目を浴びる。苛烈なハラメントが横行し、さらにはレイプ被害にあって。辛さと同時に彼女が感じたのは、自らに書をおよぼす男たちが、父親や兄弟といった身近な人たちと何も変わらない親しみの持てる人だということだった。衰退する地方に生まれた彼らは、遠隔地の孤独で退屈な住環境に耐えて、低収入から抜け出そうと労働する。

性暴力を招く抑圧的環境は、経済格差によって生み出されていたのだ。本社からの視察や新聞記者からの取材の場面では、こうした格差が都市住民からは見えないこともわかる。

もう一つの問題は、採掘による環境破壊だ。

先住民の土地が企業に囲い込まれ、地盤を掘り起こして土地を破壊する。有毒な廃棄物を溜めた池では、カモの大量死が見られる。

見開きで描かれる採掘場の壮大な景色は、土地に刻まれた自然破壊の記録でもある。

一人ひとりの労働者の顔が描かれるグラフィックノベルだからこそ、現場の労働者の人間性が浮かび上がる。読者を没入させ、複雑に絡み合う問題を訴える。素朴なタッチの奥に力強さが宿る作品だ。

（四四八頁 税込三〇八〇円 10月刊）

みんなどうやって書いているの？ 10代からの文章レッスン

小沼理編著、ほか14人著
河出書房新社



書きたい。文章を、書いてみたい。昔からそんな衝動があった。日記、ブログ、

小説……しかし、そのどれも三日でやめてしまった。評者が中学生だった頃の話だ。

思うに、あの頃の試みはあまりにも奇る辺なきものだった。この頼りない衝動を、どうやって昇華させたらよいのか。どう磨き、どう持続させるのか。本書はそうした悩みにも、多様なジャンルの文筆家たちが寄り添い、具体的な方策を提案するアンソロジーだ。

と言っても、アドバイスはありきたりなものである。——見たものをただ書いていくうちに、自分の感性が浮かび上がってくるでしょう。五秒間に二〇〇字かけて日記を書いてみましょう。「書く」仲間を周りにつくりましょう、締め切りを設定しましょう……。しかし、ありきたりなのに響く。それは、各人の辿ってきた軌跡とともに語られるから。みな「書く」ことに可能性を感じて出発し、紆余曲折を経つつ、今も書き続けている。

また面白いことに、どの章を読んでも、あの意識が共通していることを感じる。「書く」

ことで伝えられるものには限界があるし、ほんの少しのことをきちんと伝えるだけでも難しい——そんな意識だ。「レッスン」と銘打つ本書だが、単なるハウツー本ではなく、文筆にまつわるエッセイ集でもあるのだと思う。評者は今この『綴葉』で、仲間と環境に恵

まれて執筆に取り組めている。しかし卒業の日は近い。京都も『綴葉』も離れた新生活の中で、あの書きたい衝動と再会した時、私はもう一度この本を開く気がしている。(朝露)

(二二六頁 税込二五二二円 9月刊)

ソーンダース先生の小説教室

ロシア文学に学ぶ書くこと、読むこと、生きること

ジョージ・ソーンダース著

秋草俊一郎／柳田麻里訳 フィルムアート社



自分で創作する。とはあまりないけれど、私は小説が、文学が好きた。でも、

ときどき意地の悪い声が聞こえぬこともある——それって何の役に立つの？

本書は短編の名手ジョージ・ソーンダースによる、実際の授業を基にした短篇小説の執筆指南書だ。読者はまずロシア文学の巨匠

(チューホフ、ツルゲーネフ、トルストイ、ゴーゴリ)による短篇作品を読み、それからソーンダース先生が解説を加える。卓越した短篇は、あらゆる細部が必然に従って配置されているという。先生は、こうした要素を分析し、解きほぐしつつ、小説執筆に欠かせないエッセンスを取り出していく。

先生が教えてくれるのは、小説の書き方だけではない。書き方と表裏の関係にある読み方も深めることができる。例えば、本書で取り上げられるゴーゴリ『鼻』などの有名作品も、実際に小説を「書く」者の視点に立った先生ならではの解説を読んでから再読すると、昔読んだときよりもっと魅力的なものに映る。そうして浮かび上がる作品の美点はより大きな文脈、すなわち「生きること」へと回収されていく。

冒頭の問いに戻ろう。申し訳ないが、はっきりした答えは用意できていない。先生は小説が持つ「効用」を過度に強調することには懐疑的だ。私たちは読みたいから読み、書きたいから書く。それでも、小説を読むと自分の中で何かが——きっとより良い方向へと——変わるのを感じる。それを再び体験するために、今日も私は頁を繰る。(荒砥)

(一六〇〇頁 税込三三三〇円 9月刊)

恋愛しない私でも

『源氏物語』は楽しめますか

西原志保著

春秋社

国語の教室で古典を扱うのは難しい。

学ぶ意義を考えてもしっくりこないし、

自分の「好き」だけでは生徒たちの眠気覚ましにならない。そして、恋愛。男女の恋愛を中心とする王朝文学を普遍的な価値のように提示すること、何となく抵抗がある。

著者の『源氏物語』研究の原動力は、恋愛や性愛を重視する社会への違和感や生きづらさだという。古典の恋愛至上主義や社会との断絶に悩んでいた私は、まずそこに驚いた。著者は「我」「心」「身」など、現代的な感覚だとアイデンティティやセクシュアリティと結びつく言葉に着目し、用例を丹念に検討する。すると、その使われ方が現代と違っていることが見えくる。たとえば「我は我」という表現は、強固なアイデンティティではなく、恋愛相手と同一化するという理想がかなわないネガティブな気持ちを示す。このように本書は、現代とは異なる文化社会を見ることで、近代的なアイデンティティ、セクシュ



アリティといった世界認識を解体することを目指している。ここに古典研究のアクチュアリティがある。

著者の問題意識は、恋愛がプライヴェートの中心に据えられていることにも向けられている。何が仕事で何がプライヴェートにあたるのかは可変的だという主張は、著者の実体験を下敷きにしていて、研究と生活が密接に結びついている。こんなふうには、古典研究と生活を地続きで考えることもできるのか。思い込みで閉ざされた世界に、あたたかな光が差し込んできた。

(二四八頁 税込二二〇〇円 8月刊)

鮎川信夫と戦後詩

「非論理」の美学

宮崎真素著

琥珀書房

金子光晴に「落木の唄」という詩がある。詩誌「荒地」の詩人・鮎川信夫を主題とする本書はこの詩から始まるため、ここではその一部を長めに引用しておきたい。官能性とユーモアに満ちた印象的な一篇だ。



「僕の指先がひろびろとした大地のうへの

／まがりくねった一本の川すじ。／「……」
／皺寄ったシャツの大雪原に／ゆきくれながら、僕があつめる／もとにかへすよすがもない／その一すじを。／その二すじを、／ふみちらすにはしのびないのだ。／僕らが、どんなにいのちがけて／愛しあつたかをしつてゐるのはこの詩文字のほかに、あない。

この風変わりな詩について、鮎川は次のような感想を漏らす。「最近の金子さん、面白くなかつたんですけれども、あれはいいと思つた。「……」最近いい詩を書いていないのでじいじになりすぎたためかと思つたけれども、そうじゃないんだな。「……」条件さえこのへばすぞい詩を書けね。本書の著者はここに、鮎川の「やわらかな感性」を見出す。

戦争体験と戦死者を傍らに戦後詩を開始した「荒地」。彼らは戦争詩に流れた「歌う詩」を拒み「考える詩」を標榜した。鮎川も戦後社会と厳しく向き合いながら詩と詩論を書き続けた。それゆえ彼には「論理のひと」という堅いイメージが付きます。しかし本書が目を向けるのはそのほころびである。「完璧な堅いイメージをまことわされてきた論理のひと、そのほころびはやわらかで魅力的である。」

凍てつくような鮎川のイメージは、本書を通じて雪解けを迎えたのではないか。(はや)

(三〇〇頁 税込五七二〇円 11月刊)

「社会」の底には何があるか 底の抜けた国で(私)を生きるために

菊谷和宏著
講談社選書メチエ



『社会』の誕生」、
『社会』のない国、
日本』に続く講談社
選書メチエの「社会
三部作」、待望の完結篇が上梓された。

本書の目次には、トクウィル、デュルケーム、ベルクソン、永井荷風といった面々が名を連ねる。政治学に社会学に哲学に文学。一見まとまりのないラインナップだが、筆者はフランス社会学の系譜に依拠しつつ、ここから「社会」の底に迫る。学術的にその内実を示せば、他者を自らと同じ意味での人間であると信じ、賭けなければ成立しえない(そして現に存在してしまっている)「社会」の超越性と実在性、とでもなろうか。

やや難解だったかもしれない。ともあれ、洪水のような引用から紡がれる論述は、非常に刺激的である(ベルクソンが出てくるのもまたアツい)。しかし、本書の魅力は単に学術的な部分にとどまらない。注目すべきは、筆者が惨憺たる現代社会に真正面から放つ強いメッセージである。「社会」の底にあるも

の、それは人間の生という所与の事実——我々は信じ合わなければ、愛し合わなければ、「人間」も「社会」も論理的かつ経験事実に成立しえないという現実^{リアリティ}「実在」である。今やロックバンドですら叫ばない言葉を記すのに、どれほどの覚悟が必要だったろうか。分断・対立という語はもはやクリシェと形容するにも陳腐で、「我々」という共同性すらも瓦解している。そんな時代に、それでもなお我々は生かし合っているのだと筆者は言う。途轍も無い重量の生の横溢が感じられる一冊であった。

(二八四頁 税込一七六〇円 8月刊)
(浅煎り)

『綴葉』編集委員募集および 投稿募集のお知らせ

『綴葉』編集委員会では、編集委員を新たに若干名募集します。

仕事内容は、毎月二〜三本の書評を書くこと、毎週金曜日に行われる編集会議に出席して『綴葉』の編集作業に携わることです。編集委員には毎月若干の活動手当と、書評で取上げた書籍の代金が支給されます。

対象は、京都市大学生協加入者で大学院の修

了課程ないし医学部・薬学部の五回生以上、そして右記の仕事を継続して行うことが出来る方です。

この条件を満たし編集委員としての活動を希望される方は、本誌添付の読者カードに編集委員会への参加希望の旨を明記の上、生協のひとつことポストに投函するか、『綴葉』表紙記載のメールアドレスへ直接お問い合わせ下さい。追ってご連絡申し上げます。

また、読者の皆様からの投稿も随時受け付けています。採用させて頂いた方には、書籍代(上限二五〇〇円)および薄謝を図書カードにて差し上げます。ふるってご投稿下さい。書評の形式は次の通りです。

①「新刊/新書コーナー」:新刊二〇字×三二行、新書二〇字×三三行。出版されてから四ヶ月以内の書籍を対象とします。

②「最近読んだ本」:三〇字×四三行。普段の読書の中で特に面白かったものを紹介、批評して下さい。刊行時期の制限はありません。二冊以上取り上げたい場合はご相談下さい。

いずれの場合も、書名・著者名・出版社名・総ページ数・発行年月・税込価格と投稿者の氏名・所属・連絡先・ペンネームを明記して下さい。郵便・メールどちらでも受け付けます。宛先は本誌表紙を参照して下さい。

荒木飛呂彦の新・漫画術
悪役の作り方

荒木飛呂彦著 集英社新書

吸血鬼、完全生命体、殺人鬼、マフィアのボス、聖職者。魅力的なラスボスを数多生み出してきた『ジョジョ』の奇妙な冒険シリーズの作者、荒木飛呂彦が悪役の作り方を中心に「漫画の王道」の歩み方を解説する。

本書の内容は非常に論理的だ。なぜ悪役が重要なのか。すべての物語は「主人公vs悪役」を基本構成としているとみなせるからだ。主人公が乗り越えろべき困難が弱くダサい相手では、ストーリーや世界観が良くとも盛り上がり欠けてしまう。そして魅力的な悪役を考えることは、社会における悪や人間の生々しい感情への思索といった、漫画の深みを増す要素と不可分になっている。悪役の作り方を習得することが「漫画の王道」へつなげていくのだ。実際に悪役を二から作りながらキャラクターの細部と連動させて、パズルのように物語を立ち上げていく実践編は必読だ。本書は漫画家志望者向けに書かれたものだが、ロジカルな創作論は物語を楽しむ者にも面白さの背後にある緻密な構造の鑑賞を可能にする深い視点を与えてくれる。(茂)

(二二四頁 税込二〇三四円 11月刊)

スマートシティはなぜ失敗するのか
都市の人類学

シャノン・マターン著 依田光詠 ハヤカワ新書

ビッグデータやデジタルプラットフォームを活用して都市環境を管理・整備し効率性と利便性の向上を目指す「スマートシティ」が世界各地で構想されている。デザイン人類学と都市論を専門とするマターンは著書『都市はコンピュータではない』で都市のあらゆる情報を数値化し二元的に管理しようとする現代の潮流を批判した。本書はその邦訳である。

たとえば犯罪発生率や交通量を数値としてデータセンサーは、複雑な現実を数値として提示する。これについて著者は、図書館や博物館など都市における情報管理の歴史を振り返り、データがどこから来たのか、誰の利益に奉仕しているかという政治性に注目すべきだと主張する。管理機構に根差す政治的な固定観念が都市の情報管理の中に作用し、社会的弱者や自然環境を捨象している。しかし数値化はこうした複雑性や政治性を取り払い、データをクリーンなものにしてしまうのだ。スマートシティの限界を暴く本書は、環境と居住者に根ざした都市の在り方を考えるための重要な論点を提示している。(たいやき)

(二五六頁 税込二三八六円 10月刊)

論理的思考とは何か

渡邊雅子著
岩波新書

論理的思考とは何か。アカデミック・ライティングや、数学の証明を想起する人が多いだろう。しかし本書は、「論理的思考は目的に応じて形を変えて存在する」と述べる。あの価値観に沿って形成されてきた、思考の「型」。それが、当該領域における論理性なのである。そしてその論理的特徴は、国によって異なる作文教育の型にも現れるのだという。例えば日本の「感想文」の型も、体験を通じた書き手の感動や成長を共有するための、一種の論理構造を持つ。そして、読み手はそれを追体験し、自分とは異なる主観に共感をする。こうして共感力が育まれることと、間主観的な「場の空気」を読む日本の風土は、互いに影響を及ぼし合っているのである。

こんな調子で本書は、アメリカ、フランス、イラン、日本の価値観と思考の型を取り上げ論じており、思想史や教育史を包括した比較文化学の様相を呈する。思考という掴み難いものが整然と特徴づけられていくことに知的興奮を覚えつつ、それらをメタ認知し、活用しようと思わされる、驚くべき良書。(朝露)

(二〇四頁 税込二〇二二円 10月刊)

ジャズ・ピアノの世界——鍵盤を駆ける手に魅せられて

今月号の特集は音楽。それは時に人の心を救い、人が生き続ける理由になる。なにぶん、私もその一人。この世にもし音楽がなかったのなら、私は教室のあの息苦しさで耐えかねて窓から飛び降りていたと思う。間違いなく、私は今のように存在していなかった。けれど、その特集についてひとつだけ、私は声を大にして言いたい。

「ジャズがないじゃないか！」

私が秘密裏に行った調査によれば、大学生に必要なもの、それはジャズと珈琲と少しばかりのかけがえの無い出会いである（諸説ある）。しかし、だ。熱狂と興奮の音楽だったジャズは、いつの間にか高尚な音楽、お洒落で敷居が高いものになってしまっているらしい。取っ付きにくく難解？ そんなイメージは横に置いてもらってジャズの解放感を味わってもらいたい。

ということで、ここからは特集の私的な延長戦だ。ジャズの立役者、ピアノの世界を拓いてくれる本を紹介しよう。ぜひBGMに『I could write a book』でも流しながら読んでほしい——邦題は「書き残したい私の恋を」。マイルスのテイクが有名だけれど、個人的にはアナ・オデイの歌声も流れていいんじゃないかと思う。

今回取り上げるのは『ジャズピアノ その歴史から聴き方まで』（上・下巻、岩波書店）。光沢のある黒地に背に佇むはデューク・エリントンとビル・エヴァンス——私が敬愛する二人の伝説が表紙を飾る。まったく、著者は良い趣味をしてくる。



著者は日米双方を舞台に活動するピアニスト兼研究者。ジャズピアノの歴史を辿りつつ、奏法や編成に目配せした聴き方の話が繰り返される。本書はとにかく濃密で、四百を超える注には、膨大な量の一次資料のリンクと学術論文が並ぶ。例えば、ピアニストのプレイスタイルが「燃焼派」「錬金術派」「リズム派」「メロディ派」に分類できるという見立てはなかなか面白い（エリントンとエヴァンスは、複数の音の組み合わせで秀でた錬金術派だ）。

この本が素晴らしいのは、鑑賞にありがちな印象論を避け、「この曲の何分何秒から、ピアノの左手がどう動いていて……」と、再現可能な具体的な「聴き方」が解説されているところ。曲を一要素ごとパース



別に意識して聴くことで、音楽が立体的に理解できるようになる。その意味で、本書は（かなり分厚いけれど）良い入門書だ。

細かい事を語り出せば切りがないのだけど、本書ではピアニストそれぞれの持ち味と魅力が存分に語られている。願わくは、本書をきっかけにあなたのお気に入りのピアニストが見つかりますように。

ちなみに、京都にはジャズを聴ける場所が意外とたくさんある。専門的なことなんてわからなくていい。ジャズを聴いてみたいという想いがあれば十分だ。あとは音に体を揺らして、波に身を任せよう。白と黒の鍵盤を駆けるピアニストの両手に魅せられよう。自己の輪郭が次第にとろけていくあの感覚に身を委ねるのは、きっとあなたが思っているよりも簡単で、愉しい。

（浅煎り）

芥川龍之介の話

僕が大好きな作家の話をしよう。芥川龍之介——そう、あの、文豪の、あの芥川龍之介だ。教科書に載っている、いかめしい写真に押しこまれたエスタブリッシュメント。

でも、例えばこう考えてみたら？「蜘蛛の糸」の主人公は本当はあのお釈迦様なのだ。人間を救うことは容易ではない。一縷の望みを託して垂らした糸は、やはり人間を救うことはできない。美しい心を持っていて瞬間があるとしても、罪を免れる人間なんていないだろう。君には天国に行く確信はあるか？僕たちには糸は垂らされてくるだろうか？お釈迦様がまします極楽、蓮の池には——御覧、たった一人の人間もいない。居るのは蜘蛛だけ。極楽は人間には荷が重いのだろう。晩年の彼は実際そう書いている。

天国の民は何よりも先に胃袋や生殖器をもっていかないはずである（『侏儒の言葉 遺稿』）。

そして、お釈迦様は作家の謂としたら？彼は自らの意思で、世界を創造するが、人間を描こうとする限り、作家たる彼をもってしても人間を救うことは叶わないということの寓話、こう考えようと昼下がりの極楽は突然凄惨な色彩を帯びてこないだろうか。

これが、芥川龍之介の人生だったのかも知れない。村上春樹はこう書いている。芥川が示すのは、暗闇の中に浮かぶ明かりの、短く儂い美しさのようなものだ。彼の的確にして繊細な文章が、その明かりを一瞬手中に捕らえる（『切腹からメルトルダウンまで』）。

例えば、「將軍」の最後の幕切れ。

父と子は小時の間、気まつい沈黙を続けてゐた。

「時代の違いだね。」

少将はやつと付け加えた。

「ええ、まあ——」

青年はこう言いかけたなり、ちよいと窓の外のけはひに、耳を傾けるような眼つきになった。

「雨ですね、お父さん。」

「雨？」

少将は足を伸ばした儘、嬉しそうに話を転換した。

「又樞樑が落ちなければ好いが、……」

この一節を、全盛期の三島由紀夫は『文章読本』で瀟洒ながらのわざとらしさと看破してみせた。しかし十年後、最晩年のエッセイ「小説とはなにか」には再びこの一節が現れる。自殺した三島の人生を明滅する、自殺した芥川の影……。

訳知り顔で素通りするのではなく、必ずそこにある凄まじい空中の火花に目を凝らせ（『或阿呆の一生』）。そのとき彼の作品には生気が漲り、打ち下ろすハンマアのリズムが響く（『侏儒の言葉 遺稿』）。ふと横を見ると、教科書の写真の中で彼が見せるのは共犯者の微笑み。彼の盛期からほぼ百年の流転を闊した現代——少しの自負を交えつつも、彼は自らの作品が古書店で紙魚に蝕まれているところを思い描いていた——この百年後においても、彼の作品を手にするのが可能であると、それを彼になんとか伝えることができると、願いながら、僕は寒空の下、巣鴨の慈眼寺を後にしたのだ。雪はやむけしきもない……（『老年』）。

（コーク）

編集後記

最近、河原町の某店で4足990円の靴下をちゃんと4足買いました。今まで履いていた靴下はひとつの例外もなくすべてチャコールグレー。けれども今回は思い切って、黄色やオレンジ、緑や紫も買ってみました。すると驚き、靴下に彩りがあるだけで、テンションが上がるのなんの。たとえば歩いているとき、あるいは足を組んでいるとき、靴とズボンのすき間から目にも鮮やかな黄色の靴下がチラッと顔を覗かせると、なんだか途端に嬉しくなります。チラ見え程度でこの威力。服というのは人にこれほど影響を及ぼすのかと、20代後半にしてはじめて知りました。

と、書きながら思い出したのは、去年の年末、実家のある東京に帰省した際、友達に無理やりB-Boyっぽい(?)太めのズボンを履かされたこと。「とりあえずそこらへん歩いてみ？」と言われ、「なんでこんなことせなあかんのやろ」と泣々歩いてみると、なんとびっくり、自分でも気づかぬうちに歩き方がB-Boyの歩き方(?)になっていました。肩を左右に揺らしながらちょっと気急そうに、チューイングガムでも噛んでいそうなあの歩き方。「服によって俺の行動様式が規定されている!？」と動揺したのをよく覚えています。

服が変われば人も変わるんですね。(ばや)

当てよう! 図書カード

最近『メダリスト』にハマってフィギュアスケートの知識が増えた編集委員からの問題です。全部で6種類あるジャンプは、採点する際、種類によって基礎点が異なるようです。同じ回転数のとき6種類の中で2番目に高い基礎点をもつジャンプはどれでしょう。

1. サルコウ
2. ループ
3. ルッツ
4. アクセル

(ひるね)

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記QRコードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは3月15日です。



《10月号の解答》 10月号の問題の正解は、3.の『百年の孤独』でした。文庫化に続いて某配信サイトでドラマも始まりましたね。どんな感じになっていくのか楽しみです。図書カードの当選者は、あめしるこさん、いいみよんさん、ぼちょむチキンさん、ゆでんさんの5名です。当選おめでとうございます。

(コーク)

読者からひらひら

○ぼちぼち「詩」の特集とか!?

(天ノヲそぼ大盛り)

—— たしかに、評者が個人的に詩集をとりあげていることはありますが特集では取り上げられていないですね。皆で詩について書くことで、新たな視点が生まれておもしろそうですね。僕も他の評者の読む詩が知りたいので会議で提案してみます。詩集以外にも詩論などについても、僕自身もっと知りたいところです。ちなみにですが僕が冬に読みたい詩といえは石原吉郎です。あの凍えるような厳しさは他では味わえませぬよね。

○今年もノーベル賞は、発表前からもり上がりました。日本からは今年も受賞者は出なかったけれど、来年こそ……ですよね。

(いみみん)

—— 日本からは残念ながら受賞者が出ませんでした。お隣の韓国からアジア人女性初のノーベル文学賞が出ましたよね。韓国文学がアツいというのは知っていたもののまさかノーベル賞とは！驚きでした。綴葉では先月号に引き続き今月も韓国文学の作品を取り上げているのでぜひそちらもご一読ください。

(コーク)